

外見問題に関する主体化の困難について

—— 男性型脱毛症とユニークフェイスの事例を参照して ——

戸 梶 民 夫

はじめに

本論は、従来、社会学の射程の外に押しのけられてきた外見という問題構成について、差別論と主体化論の視点を用いて、社会的地平を切り開くことを目的としている。外見問題とは、ここでは自身が見た目に不細工であったり、容貌に傷やあざがあったりすることによって発生する悩みのことを指している。こうした外見に起因する問題は、一方で個人的な悩みの次元に、また一方では漠然とした差別意識の次元に還元され議論されてきた。しかし、外見の問題は内部に豊かな社会的思考の可能性を保持しており、ゆえにこの論考では外見問題の考察を通して、個人と社会の関係性についての新たな見方を見いだせることが示される。その考察の手始めとして、他者の眼差しによって対象がスティグマ化される過程を取り扱ってきた差別論と、副次的なテーマとして外見を取り扱ってきた消費社会論、ジェンダー論を通じ、外見の問題性が軽視されてきた現状を指摘してみることにしたい。

現在社会学の中心領域の一つである差別論ではひとつのアポリアを巡る論争が繰り返されている。それは、差別される立場に置かれた人々が自らを被差別者として主体化すべきかどうか、というアイデンティティ・ポリティックスにかかわる問題である。一方で差別される人々が自ら被差別者として主体化し、そうした劣等的地位を押し付ける制度を変革すべきであると主張する立場が存在する（政治的アプローチ）。しかしもう一方では、被差別者として自らをカテゴライズすることが再び同化と排除の政治学を作り出してしまうために、カテゴライズとしての被差別者の構築性を暴露することに重点を置こうとする主張も存在する（構築論的アプローチ）。

しかし、このアポリアを巡る対立を通して現代差別論が依拠する前提が透けて見える。それは、政治的、構築論的アプローチ双方ともに、打破すべき対象としての差別現象が成立するための条件として、差別的対応を受けている人々が自ら被差別者として主体化でき

る、という前提を保持していることである。つまり、悩める人が自らをマジョリティと異なる属性を持つ被差別者として主体化する可能性を持ってない場合には、それは差別現象としてはとらえられない、ということ、こうした前提が社会学的差別論において暗黙のうちに共有されているのである（このような形で前提とされている差別現象を総称して「属性差別」と呼んでおく）。しかしこのことは、外見問題を差別として扱う道を閉ざしている結果につながっている。なぜなら外見問題においては、外見に悩める人が被差別者として主体化することが始めから大きな困難を抱えているように見えるからである。

例えば次のような外見に悩むの人の語りに、そうした主体化を困難にする力学を読み取ることが出来る。

「〔からかいを〕言っている人間はむなしい人間だと思ってるけど・・・抗議したら負けてしまう。自分の心の中では、このやろ、と言うけど、笑いを取るしかない。ハゲてることを気にしている、ということを知られるのはすごく嫌ですね。そんなこと気にしてるんだ、と笑われそうな気がする。髪の毛を気にしない人間だと思われたい、ですね。心底〔からかいに対して〕笑っていられる状態が理想なんですよ。〔心からではなく〕演技でレスポンスすると疲れるんですけどね。」（34歳、男性）

この語りは、筆者が行ってきた男性型脱毛症に悩む人たちのインタビューから引用したものである⁽¹⁾。この語りから読み取れるように、外見の問題においては当事者は自分が見た目に悩んでいることを知られることに対して強い拒否感を呈することが多い。つまり自分が外見によってつらい思いをしていることを自認したり、外見のせいで差別されるものとして主体化することを妨げられる傾向が見られるのである。

属性差別では被差別者が自らの本質的属性（女性、黒人、障害者等々）に基づいて主体化することが原理的に困難であるようには見えない。そして、そうした属性差別を前提としている現在の差別理論では、被差別者としての主体化が妨げられているように見える外見問題は差別現象としては扱いづらくなってしまうのである。

また外見を論じるテーマとして扱う学術的研究がなかったのか、といえそうではない。

⁽¹⁾ このインタビューは、2001年12月から現在まで継続的に続けられているものである。調査対象はインターネットの男性型脱毛症を主題とした掲示板にアクセスしている人々に個別に願い出て了承していただけた人だけに行った。質問紙は用意せず、自由連想という形で男性型脱毛症の悩みについて語っていただいた。

例えば消費社会論におけるファッション、モード論⁽²⁾、ジェンダー論における女性美抑圧⁽³⁾やミスコン批判⁽⁴⁾などが代表的なものではないかと思われる（社会学以外では客観的容貌に対する認識傾向を実証的に明らかにしようとする認知心理学なども存在する⁽⁵⁾）。しかし、こうした先行研究においても、外見を社会的な差別問題との関わりにおいて論じたものはほとんど存在しない。

都市化の進展、情報社会化、交通における移動可能性の上昇が、目に見えぬ内実よりも外面的、表層的な記号に重きを置く傾向を推し進め、人々を生産中心の経済体制からくる未来志向から消費中心の現在志向へと飲み込んでいく、という主張は、都市研究、消費社会論などで繰り返し主張されてきているように思われる。そして外見も意味の制約や同一性から外れた表層的な記号として扱われ、新しいモードを追いながら他者から見える自らの姿を常に更新していく、という文脈の中で語られることが多い。しかし、このように外見を意味や同一性から解放された記号として分析することは、逆に外見に関する主観的な解釈や外見の意味の問題を捨象することにつながりやすい。そのためこうした消費社会論的分析では、外見に関する悩みを持つ人の存在が取り逃がされてしまい、結果として外見で差別されるかどうかという考察が拒否されているように思われるのである。

一方ジェンダー論においても、女性に対する美の抑圧（美の鎖）やミス・コンテスト批判という外見的側面をテーマに論じている論考は複数ある。こうした文脈で外見の問題を扱うときには、まず見る立場にいる男性が見られる立場にいる女性に外見的な「美しい／醜い」という「美の規範」を押し付け、それにより女性の自由な活動を制約している、という形で批判されることが多い。外見評価に関するそうしたジェンダーによる差異と不平等は確かに存在するし、女性のほうが外見に対する多くの抑圧にさらされてきた、という点はその通りである。しかし、こうしたジェンダー差異を軸にした分析では、まず第一に属性差別としてのジェンダー不平等を解消することに重点が置かれる傾向がある。それゆえ、女性が逆に男性の外見を見たり評価する力を獲得することで「見られることでの男女の不平等」が解消したならば、外見の問題自体が社会的問題としては終了すると考えられ

⁽²⁾ 例えば、能澤慧子、1994、『二十世紀モード』講談社選書メチエ、山田登世子、1990、『華やぐ男たちのために』ポーラ文化研究所、また講座現代社会学シリーズでは21巻に『デザイン・ファッション・モード』というテーマで一卷が割かれている。

⁽³⁾ 例えば、ナオミ・ウルフ、1994、『美の陰謀』TBSブリタニカ、リタ・フリードマン、1994、『美しさという神話』新宿書房。

⁽⁴⁾ 吉澤夏子、1992『「美しいもの」における平等』、井上芳保、1992、『ルサンチマン型フェミニズムと解放のイメージ』、共に江原由美子編『フェミニズムの主張』勁草書房、井上章一、1992、『美人コンテスト100年史』新潮社。

⁽⁵⁾ レイ・ブル、ニコラ・ラムズィ、1995、『人間にとって外見とは何か』講談社。

たりする。またはそのジェンダー不平等が解消された時点での男女問わずだれも見える力を獲得した後にくる外見の問題をうまく論理化できていないように思われる。つまりジェンダー的分析によると、男性、女性という属性としての同一性に外見の問題を従属させるために、外見そのものによって差別が果たして成立するのかどうか、という問題は、はじめから見えなくさせられているのである⁽⁶⁾。外見というのは同一性、属性の外部に覆いかぶさる「形」のことであるのに。

このように、現在の差別理論の現状においても、外見に関する先行研究においても、外見という問題を差別現象としてあつかえるかどうか、という問いかけは、それ自体がはじめから隠されてきた問いのように見える。しかし、はたして外見の悩みが社会的差別として成立するのが難しいとされる現状をそのまま肯定すべきなのだろうか。外見に悩んでいる人は社会的な抑圧を受けているわけではないのだろうか。逆に、こうした被差別者としての主体化が原理的に困難であるかのような外見問題をかかえる人々は、外に向かってそのつらさを訴えて悩みを可視化させることもできず、さらに周りからの圧力に対処する方法も持たずに耐えているのが現状ではないだろうか。

この論考では、外見問題を差別問題として扱うことを初めから拒否するのではなく、むしろ一体どのようにして外見問題が社会的な差別現象として成立できないのか、というその論理を詳細に説明することを目的とする。それによって、果たして外見問題はほんとうに差別問題として扱わないのが正当なのか、むしろ外見問題を社会的問題として立てることが出来るためには、どのような論理や差別論を構想することが重要なのか、という外見問題を扱うための新しい問いへの道筋が開けてくるはずである。そして方法論としては、まずアルチュセールを参照して従来の主体化論と差別論の形式的抽象化をはかる。そして、その属性差別論の形式的論理から抽出された被差別者の主体化の条件を外見問題に悩める人がどのように満たせないのか、を探っていくことでこの主体化不可能性を説明するとい

⁽⁶⁾ 須長史生は社会学的知見から男性型脱毛症を研究しているが、彼においても男性型脱毛症を分析する際に、ジェンダー分析の視点からアプローチしている（須長史生，1999，『ハゲを生きる』勁草書房）。それゆえ、女性美の抑圧において問題視されていた男性からの女性への美の規範のおしつけ、という観点をひっくり返し、女性から男性に対して「ハゲはもてない」という規範的偏見が押し付けられている可能性について指摘するのである。須永はその際、男性に押し付けられる「ハゲ＝もてない」という規範の存在はなんら根拠のあるものではなく「フィクション」であるとして論じている。このことはとても的確な指摘であるようにおもわれる。しかしそれがなぜ「フィクション」であるのか、またこのフィクション性をもつ規範がどうして悩める人においてその存在を確信されているのか、という点に関する分析は須長においては不十分である。外見を判定する規範が、属性を判定する規範と比べて「フィクション」と捉えられるのはどうしてなのか、という点に外見の問題の根本的な特殊性を見るべきだし、その点にジェンダー的分析が、外見の問題を捉えるときに突き当たる限界を見てとる必要があるのである。

う目的に答えてみたいと考える。

第一章 主体化と属性差別の形式的モデル

まずここで考えてみたいのは、被差別者の「主体化」を成り立たしめる根本的な条件についてである。主体化理論のよって立つ前提を明らかにすることによって、初めてそれとの差異として外見問題の主体化不可能性について考察する準備が出来ると思われる。それゆえこの章では、まずアルチュセールのイデオロギー論を見ていくことにしよう。そしてそうした議論から、近代社会において主体化の影である属性差別の被差別者が、自分たちで自分たちのあり方を定義し被差別者として主体化する過程を形式的にモデル化してみたい。この形式化は単純化という批判を受けるだろうが、しかし今まで錯綜した論理の中で捉えられてこなかった外見問題の特質を浮かび上がらせるための戦略的な方法論として考えてもらえればと思う。

アルチュセールは「イデオロギーと国家のイデオロギー装置」の中で、主体化の諸形式を抽象的に論じている。そして山本哲士によれば、この主体化の過程はつぎの4つの段階に分けられるという⁽⁷⁾。

- ①小文字主体としての《諸個人》への呼びかけ
- ②諸個人の太文字主体への服従。
- ③小文字諸主体と太文字主体の間の、そして小文字諸主体間の、相互の再認と、最終的には、小文字主体自身による小文字主体の再認。
- ④かくしてすべては上首尾で、小文字諸主体が自身を何者であるか再認し、それに応じて行動さえすれば、将来も上首尾であろう《かくあれかし!》、となるための絶対的保証。

こうした主体化の四段階の過程を具体的に記述する場合、警官による不審者の呼び止めの例がよく持ち出されてくる。「《おい、お前、そこのお前のことだ!》という毎日耳にする警官のまったくとるに足らない呼びかけ・・・このように想像した理論上の場面が往来で起こったと想定するならば、呼びかけられた個人は振り向くだろう。こうした180度の単なる物理的な方向転換によって、彼は主体になるのだ。⁽⁸⁾」

⁽⁷⁾ ルイ・アルチュセール・山本哲士他、1993、『アルチュセールのイデオロギー論』三交社。

⁽⁸⁾ アルチュセール、1993、87。

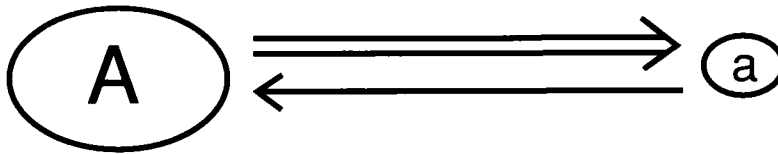
警官が呼びかけるとき、「そこのお前」とされる人称の位置は単純にその呼びかけられた《個人》ではなくて、国家の法に付き従う「国民」である。つまり、個々の《諸個人》がその位置に滑り込むためにあらかじめイデオロギーによって用意された「空白」である。そして、その呼びかけに対して《個人》が振り向く時には、同時にその《個人》は「国民」としての「空白」に埋め込まれながら、一個の自律した主体として主体化することになるのである。「どこからか呼びかけがかかった。《おい、お前、そこのお前だ！》。ひとりの個人が、問題となっているのは自分だということを信じつつ、あるいは疑いつつ、あるいは知りつつ、それゆえ呼びかけの対象となっているのは《自分だということ》を認めつつ、振り向くのである。⁽⁹⁾」

こうしてイデオロギーが提供する空白に埋め込まれることで《諸個人》は主体化されることになるのだが、この時重要なのは、この呼びかけを行う存在である。例では警官が取り上げられているが、もちろん一個人の警官がその存在ではない。この呼びかける存在をアルチュセールは「絶対的な主体」という言葉で表現しているが、つまりそれは大文字の主体の意味である。そしてこの警官が象徴するのは、絶対的正義としての法である。この絶対的主体を表象する存在は宗教的な神であったり科学的観察者であったりと様々な形式をとることになるが、その位置から唯一の正義や救済や真理といった絶対的な保証を指示し、《諸個人》を主体化へと導く存在であることは共通している。つまり主体化以前の《諸個人》は小文字の主体としてその大文字の主体からの呼びかけが期待している位置に自らを重ね合わせようとすることで、大文字の主体に服従し、結果として主体化されるのである。

こうしたアルチュセールの主体化モデルから注目したいのは、主体化には必ずイデオロギーの唯一の中心を占める「大文字主体」と呼びかけられる小文字の主体との「服従関係」の成立、さらにその関係の設定により遡及的に抽出される「大文字主体」という項の成立が《諸個人》において確信されることが必要条件となっている、ということである。服従すべき小文字の主体として《諸個人》を「おい、そこのお前！」と呼びかけるのは一個人としての警官ではなく、法を体現した「大文字の主体 (A)」である。その「大文字主体 (A)」に呼びかけられた《諸個人》が「保証」に惹かれ服従を強いられる小文字の主体 (a) と化した時に、主体化が成立するのである。

⁽⁹⁾ アルチュセール、1993、88.

図 1



ここで主体化の必要条件として、大文字主体と小文字主体の関係、またそれによる大文字主体という項の遡及的成立が導き出された。そして、続いて論じるべきなのは、この必要条件としての「大文字主体」の有無は、「被差別者の」主体化の過程にいかに関与するのか、ということである。

ジュディス・バトラーは、女性差別において女性が主体性をいかにして剥奪されているのかについて、次のような説明をおこなっている⁽¹⁰⁾。

「自分で自分を基盤づけているこの男の見せかけの自律性は、抑圧——自律性の基盤をなし、かつその基盤をつねに喪失の可能性にさらすもの——隠蔽しようとする。だが意味構築のこのプロセスは、男の力を反映する女——幻想の自律性でしかないものに、現実の力があるようにあらゆるところでくりかえし確認してくれる女——必要とする。」

先ほど見たように主体化とは、大文字の主体に呼びかけられ、小文字の主体として振り向いた《諸個人》が、大文字の主体の位置に自らを重ね合わせようとし続ける服従の過程である。しかしバトラーがここで指摘するのは、こうした大文字の主体に服従し逆に自らの自律的、主体的な力を獲得する時には、かならずそうした幻想の自律性を現実的なものとして確認させてくれる、自律性を持たない被差別者の存在が前提とされていることである。そうした被差別者と差異化して初めて、主体化の過程が成立する。男性は決してそれだけで自存した主体的存在ではなく、自らの主体性を成立させるために女性という非主体的存在に依存しているのである。

そしてこの被差別者（ここでは女性）が、自らの置かれる立場を自己認識し、自分たちが不当に近代社会制度により差別、排斥されていることを認知し始める。そしてその自認によって、男性の側から一方的に与えられた非主体的位置を拒否し、自分たちの視線で自分たち「女性」の本質的属性を男性と変らないものとして定位しながら、被差別者として

⁽¹⁰⁾ ジュディス・バトラー、1999、『ジェンダートラブル』青土社。

の主体化を実現するのである。

ここで被差別者としての女性は、主体化の過程を通じて、大文字の主体の呼びかけに小文字の主体として自らを服従させる。しかし、男性が主体化の過程をふむときには、服従すべき保証を与える大文字の主体は、国家イデオロギーとしての法規範を体現していた。これにたいして抑圧されてきた女性が主体化するためには、近代社会におけるイデオロギー上の空白的な位置が与えられているわけではない。国家イデオロギー的な法規範が体現する大文字の主体によって呼びかけられる空白の位置を被差別者は持たない以上、被差別者がその呼びかけに応じて振り向く大文字の主体も、違ったものとなる。そして、この場合は科学的な観察者ともいうべき第三者的視線が持ち出されてくる。つまり観察的な大文字の主体の位置から自ら自身を眺め返したときに発見される、被差別者としての「真なる」姿、これが被差別者の本質的属性としての意味をもつようになるのである。

つまり男性社会の中で貶められてきた女性が被差別者として主体化するときには、男性と違ってヘゲモニーをもつ法規範の中でその位置を確定できないがために、科学的な観察者の視線から、自らを真なる本質的属性を持つものとして主体化することを要請されるのである。ここでいう本質的属性とは、観察者としての大文字主体の位置に重ね合わせたときに現れる自らの姿である、ということができよう。

このように、主体化の過程を抽象的な形式に基づいてモデル化してみたときに、被差別者が主体化するために必要な条件を抽出することが出来る。それは、大文字の主体の位置から振り返ることによって明らかになる自らの本質的属性が存在することを確信していなければならない、という条件である。この条件は、女性差別のみならず黒人差別、障害者差別等々、近代社会の成立の背後でかならず抽出される全ての属性差別の被差別者において共通しているものとして考えられる。

こうして主体化論と差別論を振り返ることで私たちは、大文字主体の位置から映し出される自らの「本質」を確定出来るという確信が、属性差別における被差別者の主体化に必須の条件であることを示すことができた。確かに、女性、黒人、障害者、部落、民族といった多様でしかも交錯する差別現象においてこうした形式化は単純化しすぎるという批判をうけるだろう。しかし、私たちがここで対象化したいのは「外見」という問題である。そして外見問題は、このように抽出された属性差別を前提とした従来の主体化論と差別論の文脈からは、どうしてもはみ出してしまいう側面を持っているように思われる。そして、その属性差別を前提とした差別論の限界を指摘することによって、逆に外見問題がこれから問題として扱われるべき位置を指し示すこと、そのことに焦点を当てるための一つの準

備としてこうした形式化を経る必要があったことを述べておきたい。

ここで、改めてこの論考の主題である外見の問題に戻ってきたわけであるが、ここで外見に関する圧力にさらされている人を、論じる対象としてどのように定義すればいいのか、という問題に突き当たる。ここでは暫定的に「本人が自身の外見を悩んでいる人、また自身の外見を悩むべき程度のものとして考えている人」として定義しておきたい。こうした自己循環的な定義を取らざるを得ない理由は、次章において説明されるだろう。

そしてさらに、私たちはこの外見に悩める人の分類を被差別者としての主体化の可能性の面から、二類型に分けたいと思う。それは、まず主体化がまったく不可能であるように見える外見の悩みを抱える人々、他方は一見して主体化が可能であるかのように見える外見の悩みを抱える人びとである。つまり外見に関する悩みを抱える人々において、その悩みを社会的問題として捉えることが最初から禁じられている人々と、その悩みを社会的問題として捉え主体的に抵抗することが可能であるように見える人々（実際にはそうではないのだが）が分けられるように思われるのである。この前者の主体化が禁じられている人々の例として、筆者が聞き取り調査を行ってきた男性型脱毛症に悩む人々の経験を、さらに後者の主体化可能性を保持している（ようにみえる）人々の例として、ユニークフェイスという団体に所属する「異形」の外見に悩む人々の経験を取り上げて見たい。これらの人々の経験を取りあげることで、外見の問題に悩む人において先に見た主体化可能性の条件がいかなる困難さにさらされているのかを明らかにしていこうと思う。

第二章 男性型脱毛症に関する主体化の禁止——非同一性と偶有性——

自身の外見に関する悩みを社会的問題として捉えることが禁止されているかのような人々を代表するものとして、男性型脱毛症に悩む人々の経験を取りあげる。男性型脱毛症とは、いわゆる加齢による「ハゲ」といわれる症状で、頭髮の薄毛化、脱毛化を意味する⁽¹¹⁾。しかし、どの程度の頭髮量の減少で男性型脱毛症だといえるのか、ということを定義するこ

⁽¹¹⁾ なぜここで「ハゲ」という言葉を使用しないで、男性型脱毛症という言葉を使用するかについては理由がある。後にも述べるが、この「ハゲ」という言葉は、脱毛症で悩んでいる人においては、自分の状態を名指す時には使いづらい傾向がある。またこの「ハゲ」という言葉が使用される時にも、それは冗談の文脈やライトなニュアンスで使用され、当人の状態を真面目に名指す言葉として使用されがたい事態が見受けられるのである。その意味で、ある種の政治性をもつ単語であるために、ここではより中性的ともいえる男性型脱毛症という言葉を主に使用し、そうした政治性、権力性のニュアンスが含まれる時に「ハゲ」という言葉を使用することにしたい。

とは難しい。もちろん医学的な脱毛段階の客観的分類は存在するし⁽¹²⁾、統計的にどの程度の脱毛具合が男性型脱毛症というかを調査すれば、ある程度の有意水準を持った傾向が取り出せると思われる。しかしそれでもむずかしいのは男性型脱毛症の場合、頭髮の量が物理的に少なくとも、必ずしも本人が自分自身のことをハゲである、と考えているわけではない、ということだ。幾ら頭髮量が人並みでも、目立つ一部分の量が減っているだけで本人の悩みの度合いは非常に大きくなりうるし、また頭髮量は少なくとも髪型で対処できたり目立つ部位で無かったりすれば、悩む度合いは格段に低いはずである。後者の場合は、男性型脱毛症の経験自体が存在しないということもありうるのである。それゆえ、この男性型脱毛症の場合には、どの人が外見の問題を抱えているのかを定義しにくい面がある。ゆえに、ここでは暫定的に、須長史生が用いている「その人がハゲだと認識しているものをハゲと呼ぶ」という同語反復的な定義を採用することにする⁽¹³⁾。つまり、自身の外見が「ハゲ」である、と主観的に自認している人々のことを男性型脱毛症のグループを構成するものとして考えたい。

さらに、これらの男性型脱毛症にいえることは、その他のデブ、チビ、また不細工という言葉で自身を表現しようとする人々にも当てはまる。自分はどの程度デブなのか、自分は果たしてチビなのか、ということに関しても主観的な自認は様々であるはずだ。不細工という言葉はいわずもがなである。このように、こうした外見上のカテゴリーの人々は、自身がそうした外見である、という主観的な自認を客観的な基準によって窺い知れない、という特徴を持っている。ゆえに論述対象としてのカテゴリーの確定に際しては、やはり自分自身が主観的に自身の外見に問題があると自認している人々、という定義を採用することにならざるをえない。

最初に述べたように、こうした定義によって抽出された男性型脱毛症の人々においては、自らを被差別者として主体化することが禁じられているように思える。それは第一章で引用した語り以外に、次のようなインタビューの内容にも如実に現れている。

「[ハゲをネタにする風潮に対する抗議ができるかどうか] 難しいんですよね、表現が。なんかこう、まじめにゆってもかわいそう、って思われるっていうか・・・かわいそうっていうか、そういうふうにみられそうで・・・ほんまにつらいですって言うと、あの人か

⁽¹²⁾ 欧米ではNorwood表とよばれる7段階に分けた段階表があり、医療の領域では広く使用されている。

⁽¹³⁾ 須長史生、1999、106。

わいそうだ、って言われそうで。」(28歳、男性)

この男性は、テレビで男性型脱毛症の苦しさや差別の現状をまじめに訴えようとした人がゲストや司会者によってなだめられ自らの気持ちの問題へと重点がすり返られてしまった番組を見て、そうした苦しさに対してどのように抗議をしたらいいかを考えている。しかし、まじめにそうした抗議を行いハゲのつらさを訴えても、「かわいそうな人」として扱われるだけだと確信していて、それゆえ自分が髪の毛で悩んでいることを外に訴えることに大きな抵抗感を感じている。

また次のような語りも紹介したい。

「彼女がね、見た目を気にする、という気持ちも分かるんですよ。でもね、それはいっちゃいけないことなんですよ。もしねその人のね、いいところを見つけた時にね、見た目を気にするって散々口にしたことを絶対後悔すると思うんですよ。・・・でも、でも、ここが肝心のところなんですよ。〔自分も〕えらそうなこと言ってるじゃないですか。でも、その当の本人が〔髪の毛が〕薄くなってきちゃったら、そんなこと〔見た目を気にすることがいけないということ〕を熱く語ると、それは単なるひがみにしか聞こえないかったり、自分を擁護しているような、なんか、負け惜しみ根性にしか聞こえないんですね。」(31歳、男性)

この方は、20代半ばで付き合い合っていた彼女が常に見た目を気にするような人間だったことを振り返って話してくれたのだが、ここから読み取れるように、見た目に対するからかいや嘲笑を批判する時には、自分が見た目を気にしていない状態であると見られなければならないのである。髪の毛が薄くなってきたときに、ハゲに対する嘲笑を批判することはなんらかの力学によってさえぎられてしまっているのだ。このような語りから読み取れるのが、男性型脱毛症においては被差別者としての主体化を通過し、からかいや偏見に対する抗議を行うことがなんらかの力学によって禁じられているという事態である。

男性型脱毛症の人たちの語りから見るこうした事態をいったいどのように説明すればいいのだろうか。ここで考察を進めるために一人の方の非常に示唆的な語りを紹介したいと思う。

「タモリの番組でね、どの人間がゾラかをあてたり、かつらをなげる企画をやってたんですよ。それがね、再放送されるって話でね、〇〇〔局〕に電話したんですよ。抗議の。親にもね、かけさせたもん。親もね、兄弟もね、みんなですよ。みんなかけろってね。(笑) 白血病の子供とかどうするんだ！とかいってね。交通事故でやっちゃったのはどう

するんだとかね。〔筆者：どうしてそういう言い方をするんですか？〕そりゃ、大義名分というか、やっぱり、白血病とかの大義名分というか、自分がそう〔禿げ〕だから抗議する、じゃだめなんだよね。だから、我々ハゲはネタにされても、やっぱり抗がん剤とか、白血病とか、そういうさ……。〔我々は〕元気だからね。」（35歳、男性）

この方は日常的にカツラをかぶっている人であるが、カツラをかぶっている脱毛症の人々を嘲笑するテレビ番組が再放送されることに怒りを感じて抗議をおこなう。しかし、そうしたテレビ局への抗議に際して、白血病や交通事故で脱毛症を経験している人たちを例に挙げて批判しても、自らの男性型脱毛症であるがゆえの抗議をすることを厳密に自分に禁じているのである。

そしてこの男性は、その理由を「〔我々は〕元気だからね」という言葉で指し示している。つまりこの男性は、なぜ自らの男性型脱毛症を理由にして抗議できないのか、という理由を、男性型脱毛症は「元気」であるから、と考えているのである。この「元気」という言葉は白血病や交通事故ではないこと、つまり身体が「健康」であること、を意味していると考えられるだろう。しかしなぜ「健康」であることが、被差別者としての抗議の禁止につながるのだろうか。この「健康」という理由を通じて、男性型脱毛症に悩める人においていったい自らの「外見」というものがどのように捉えられているのか。

男性型脱毛症の人が自らを健康という場合、それは男性型脱毛症によって身体の機能性が侵されているわけではないことが主張されている。

「機能が違うから。足とか手〔の欠損〕だと何をやるにしてもこまっちゃうわけですね。でも髪がないってことはそれとはちょっと違う。機能性がそこまで損なわれていないから。」（53歳、男性）

どれほど男性型脱毛症が進展しても、それは自然な加齢の過程であって、人間の内側の健康が侵されているわけではない、つまり男性型脱毛症に悩む人においては、外面から見えない人格や主体的能力は髪の毛の量には関係がなくまっとうに保全されており何ら欠損しているわけではない、と捉えられているのである。

つまりこの場合、「元気＝健康」であるという言い方の背後には、幾ら外見上の変化があったとしても、自分は自分であるという自己同一性が保たれる、という考え方がみられる。どんなに外見に変化が現れても、人格や主体的能力が持続している以上その人はその

人であることは明白である。ところが逆に、男性型脱毛症をこうむる人々が「健康」である、というこうした語りが繰り返されるときには、男性型脱毛症の外見は、健康であり同一性を保持している内面に対置された位置におかれている。つまり、「外見が変わっても自分の同一性が変らない」とされることで、外見は対比的に「つまらないもの」「真面目に捉える必要のないもの」として位置づけられているのだ。このとき外見に関しては、それをまじめに見る大文字の主体は原理的に成立を禁止されているのである⁽¹⁴⁾。これが、「大事なのは見かけではなくて中身だ」というよく聞かれる建前の言説の根拠となっているのであり、外見を非社会的な問題に押し込めてきたもっともわかりやすい理由であろう。こうした外見の特徴を「非同一性」と呼んでおきたい。

男性型脱毛症は、人格や主体的能力のような内面とは対比的に貶められた外形上の問題である。そのため、男性型脱毛症に悩む人が「健康」であると強調されるたびごとに、男性型脱毛症の外見はその背後に男性型脱毛症であることの同一性を持つことが出来ないような非同一性の位置として、「つまらないもの」「真面目に扱うべき価値がないもの」として位置づけられてしまう。そして、こうした位置づけである以上、外形の問題である男性型脱毛症においては、「男性型脱毛症」という大文字の主体から同定される「本質的属性」を設定できないがゆえに、属性差別の主体化の条件を決して満たすことが出来なくなってしまふのである。もし仮に悩んでいる人が、「ささいなことである」という周りの捉え方に反発し、自身の男性型脱毛症へのからかいや侮蔑に対して真剣に抗議を行ったとしよう。しかし周りはそんなささいな外見のことに本気になっている当事者を逆に嘲笑するはずである。人々が「ハゲは健康である」という言説を繰り返すとき、その言及自身が「内面に対してつまらないもの」という位置へ繰り返し外見を貶めてしまい、悩める人が自らの外見を客観的に同定し対象化する可能性を閉ざしてしまうのである⁽¹⁵⁾。

さらに男性型脱毛症に悩む人が自身のことを「健康」である、と名指す時には、その外

⁽¹⁴⁾ 記号論的にはこれは、シニフィエから切り離された単なる表層としてのシニフィアンが、浮遊するものとして同一性を与えられないことに対応させることができるかもしれない。その文脈からいえば「外見」とは、その背後の意味から切り離されたシニフィアンとして位置づけられるだろう。

⁽¹⁵⁾ もちろんこうした内面に対比して外見をつまらないものと貶めることは、悩める本人にとっては自分自身を鼓舞する掛け声となっていることは事実である。「外見は重要でない、内面だ」という主張は悩んでいる本人に対して家族や友人からかけられる決まり文句でもあるし、また本人自身も自分自身をそのように鼓舞することで、気持ちの切り替えをはかり前向きに外見問題に対処していく方向をとる場合も多いだろう。しかし、この時二つの問題を指摘しておきたい。一つは、こうした悩んでいる人の気持ちを鼓舞する方向は、男性型脱毛症の社会的特質を剥ぎ取り個人的な気持ちの問題へと矮小化する性質を抱え込んでいることである。確かに社会的に原因があるのではなく、自分個人の気持ちの問題とすることで、生き方の質を上げることは可能だろうが、どうしてこうした悩みを感じなければならないのか、という点に

見の捉え方において「非同一性」に比べてあまり注目されてこなかった別の特徴が表れていることも指摘しておかなければならない。筆者はインタビューを繰り返すことで、男性型脱毛症に悩める人に関する次のような知見を得た。それは、どれほど脱毛症が進展した人でも、自分の頭髮に関して言及するときには「それ」とか「あれ」とかいう不確定な代名詞を使用したり、言いあぐんだり、また冗談の文脈やライトな語り口⁽¹⁶⁾で「ハゲ」という言葉を口に出したりしがちだということである。ここで男性型脱毛症に悩める当人は、自分のハゲた外見はもしかするとまだ別の人にはハゲていないようにみられるかもしれないという期待の下に、固定した客観的な定義を自ら拒絶しているようにみえる。

「〔人はあなたをハゲとしてみていると思いますか、という筆者の質問に対して〕 うーん、どうなんでしょうね、だから、別に、風の強くない日とかだったらそんなに見られても気にならないですけど、髪の毛がばーっとあがった時とかに見られたらすごくいや。だから、風の強い日とかにそとにでるのは、すごくいやなんです。」(28歳、男性)

この方は、自分が男性型脱毛症であるかどうか、大文字の主体から自分をハゲとして同定されるかどうか、という筆者の質問に対して、風の強い日という気候条件を引き合いに出している。つまり、この男性にとっては自分を男性型脱毛症として同定するよりも、いかにしたらハゲとみられないか、どのような時にハゲとしてみられるか、ということが重要なのである。男性型脱毛症に悩める人は、自身の外見を客観的に固定できる容貌として考えるよりも、むしろ条件や場所、時間によって様々にその見え方が変わりうるものとして捉えている⁽¹⁷⁾。この場合に外見は「いまこの外見でなくてもいいもの」、「次の瞬間にはまったく別のものになってしまう可能性をもつもの」、という「偶有性」の文脈で捉えられている。別の人から見れば「ハゲ」としてはみられないかもしれない、という期待がそ

関しては看過されざるをえないのである。もう一つは、外見は重要でない、中身だ、という形で鼓舞する方向は必然的に男性に特徴的な鼓舞の仕方であるということだ。逆に女性や子供の脱毛症の場合は、こうした外見と切り離す言明ではなく「病氣」として扱われることが多いように思われる。つまりこの外見に関する悩みにおいてもジェンダー差異は確かに存在しているし、鼓舞する仕方が男性特有のものであることも無視できないだろう。

⁽¹⁶⁾ 江原由美子、1985、「からかいの政治学」(『女性解放という思想』勁草書房)は、からかいという文脈がどのように当事者に本気の抗議をさせることを妨げるかについて、ウーマンリブがブスとして嘲笑された具体例から詳細に分析している。

⁽¹⁷⁾ 松本学は、「顔」と「容貌」の違いを論じることによって、顔面に対する視線の差異を問題にしている。(松本、2000、「「容貌」から「顔」に向かって」『アジャパーWEST 創刊号』)彼によると、「容貌」は医学写真の顔や症例を指し示すための顔であり、つまり観察者(大文字の主体)の視線から映し出される顔面のことをさしている。それに対して「顔」というのは、対面的に人と向かい合うときに単にデザインだけではなく「その人そのもの」が現れてくるような「個有」の顔面のことであり、それは対他的

こには見受けられるのである。この場合、単に男性型脱毛症は真面目に語るべきものでないものという非同一的な位置づけと同時に、次の瞬間には全く別のものとして（ハゲでないものとして）見られる可能性をもつものという意味において捉えられているのである。これを外見の「偶有性」の特徴と呼んでおきたい。

この「偶有性」という特徴においては、「非同一性」という特徴とは全く違った外見に対する捉え方が為されている。「非同一性」という特徴から見ると、男性型脱毛症は内面に比して「真面目に論ずるべきでないもの」「つまらないもの」という位置づけを与えられる。それゆえに、男性型脱毛症に対して真面目にその本質を同定しようとする大文字の主体が成立し難い。つまりここでは、「外見」というシニフィアンそれ自体を、大文字の主体から見られる自存した認知対象として捉えることが困難になっている。

ところが、「偶有性」という特徴においては、事態が異なる。確かに、偶有性という特徴においても、外見は「この外見でなくてもいいもの」「次の瞬間には全く別のものに变化する可能性を持つもの」と位置づけられており、そのため外見に対して時間的に持続する本質的属性を捉えるような大文字の主体の成立は初めから困難であることが示されている。しかしそれにもかかわらず「偶有性」という特徴において外見を捉える時には、「外見」という項が、ある安定した意味を確保しているのである。それは、「人格や主体的能力といった本質的な属性に対置される外見」、「属性／外見」の言語的差異として位置付けられた「外見」という意味においてである。それは、見えない本質的属性と差異化された意味において「外見」だけを対象として捉える視線が成立しているということでもある。そうした外見に対する視線の成立を示す二つの語りを紹介したい。

「例えば、女の人がいたとして、自分の好きな顔じゃなかったとするじゃないですか。でも整形してめっちゃ好きな顔になったら、どっちがいいかっていったら整形していい顔になったほうがいい、と僕はおもうんですけど・・・」（28歳、男性）

「確かに親なんかはいいですよ。自分を大事にしてほしいってね。でもですね、肩書き

な二者関係において向かい合う具体的相手の視線の中でうつしだされる姿形のことである。ここで、内面／外見の差異において位置づけられる「形」としての「外見」は、松本の言葉で言えば、大文字の主体によって見られる客観的「容貌」ではなく、「顔」の位置に近い。なぜなら形としての外見は、誰においても共通性をもって見られる「容貌」ではなく、見られる相手が違えば違った形であらわれてくるであろう姿形のことだからだ。松本自身はデザインとしての「容貌」ではなく対他関係の中で現れてくる「顔」こそが、個々人の外見のオリジナリティに焦点を当てる姿形の捉え方である、と述べているが、ここではそうした視点双方の評価は問題とせず、ただ大文字の観察者によって現れてくる容貌とは違った、個々の小文字の他者の視線を通して現れてくる「外見」にその重点が置かれていることを指摘したい。

とか見えないものを全部取っ払ったら、必ず外見にいくじゃないですか。同じ性格でね、外見だけが違うパターンの場合、必ず外見のよいほうとるじゃない。」(31歳、男性)

この二つの語りに表れているのは、整形する前と整形した後の外見の差異「だけ」を捉える視線、または性格と切断された外見「だけ」を見る他者の視線が、悩める当人の中で強いリアリティをもって捉えられているという事態である。そもそも、同じ性格で外見だけが違うパターンという事態を議論の前提としてすえられることが驚くべきことではないだろうか。そこには、性格と切断された自由に浮遊するシニフィアンとしての外見それ自体を見る他者視線の成立が確信されているのだ⁽¹⁸⁾。

「次の瞬間には全く別の外見に見られるかもしれない」という偶有性という特徴は、ある瞬間に見る他者視線に映る自身の外見と、別の瞬間の他者視線に映る自身の外見の間には、時間を超えた大文字の主体から同定されるような客観的な本質は存在し得ないことを示している。しかしそれぞれの(小文字の)他者視線は、内面から外見を切断して外見のみを捉える視線であり、それらの視線に映る外見は、「内面から切断された外見」という意味でもって捉えられる限り、共通の意味を保持できる。つまり、自分の外見が見る他者それぞれによって全く違ったように見えることは当然視されていながら、それぞれの他者が「内面と切り離して外見しか見ない」他者として意識されることで、当人においては自分の外見が「内面／外見」の差異でもって明確な認知対象として意識されるようになるのである⁽¹⁹⁾。この二つの語りにおいて、自身の外見を眺め見る視線の存在が確信されている

⁽¹⁸⁾ この人格や主体的能力の位置である内面と差異化して、それと隔絶した形として「外見」を捉えるという認識枠組に対しては、次のような批判が予想される。つまり、他者と向かいあう場面において、「形」としての外見だけを切り離すことは不可能であり、実際の対面状況においては、相手の振る舞いや言質にも注意をはらわざるをえない以上、内面から完全に切断されたかのような「外見」を研究対象として扱うことは、一般化が不可能な抽象的思考実験に過ぎない、という批判である。

確かに私たちは他者と向かい合う状況では、相手の外面を純粹に内面と切断して判断することが可能であるとは思われない。また相手が自分に対して呈する対応も、それが自身の外見の影響でなされたものなのか、それとも自分の人格的な側面も考慮した対応であるのか、といった点は確定できないはずである。しかしここで考えなければならないのは、現代社会においてはこうした具体的対面状況での向かい合う人々の間に、様々なコミュニケーション・メディアが介在する余地が格段に上昇してきているということである。携帯電話、電子メール、インターネット、さらには交通手段の利便化は、人々の関係性にまつわる選択自由度と匿名化を圧倒的に上昇させていく。そのことは、私的領域における二者関係で相手を判断する際に、内面と切断された外見での判断の重要性を確実に上昇させていくだろう。その詳細を説明することはできないが、ここで扱う「内面／外見」の切断＝差異化において初めて、外見問題と社会構造をリンクさせ歴史的社会的に考察できる道筋が存在するということを指摘しておきたい。

⁽¹⁹⁾ 代理＝表象するシニフィアンは背後のシニフィエ(本質的属性)に従属しそれ自体の意味を持たない(非同一性)。それに対して、「シニフィエ／シニフィアン」という言語的差異において「浮遊するシニフィアン」という意味を確保できるときに初めて、安定した同一性を持たない認知対象として「外見」という項が位置づけられることになる(偶有性)。

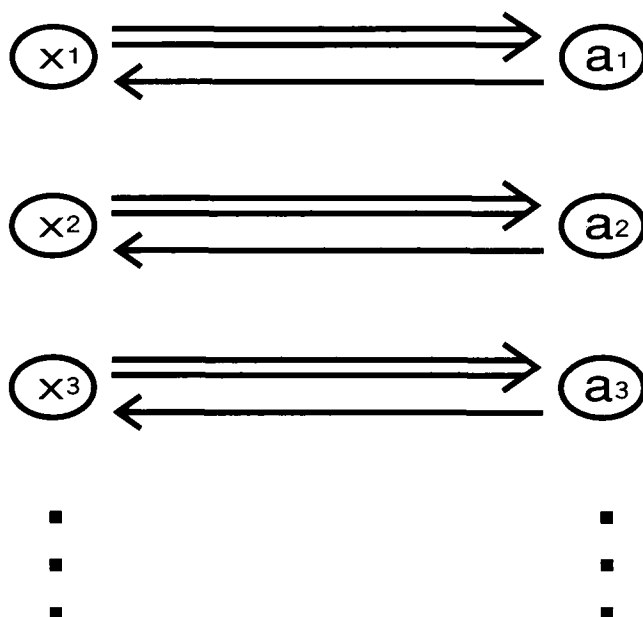
とき、このように「外見」が「内面と切り離され、次の瞬間には全く別様に見られる可能性をもつもの」として意味づけられて捉えられているのだ。

これは非同一性の特徴から示された、外見の認知対象としての不成立とは全く異質の事態である。それぞれ特徴が、外見に対する同一性を拒否していることは明確である。しかし、一方では外見の意味自体が未成立なのに対し、もう一方では外見の意味が明確に当人に理解されている。男性型脱毛症においては、人々は自身の外見を客観的本質として同定できないが、その外見の意味は当人において強く意識されている。「次の瞬間にはハゲと見られないかもしれない」という意味において。

こうして男性型脱毛症の人々がどうして被差別者として主体化することができないかを明らかにすることが出来る。一般的にそうした理由として、ハゲを初めとするブス、デブ、チビといったようないわゆる「イケてない」人びとにおいては「普通」の容貌との間に物理的な区別を行いがたく、よってカテゴリー化できないところにその原因があると考えられやすい。けれどそれは二次的な理由であるように思われる。つまり客観的な容貌に原因があるというよりも、内面と対置されて「ささいな」外見として位置づけられるがゆえに大文字の主体が立てられないこと、そこに根本的な理由があるのである（非同一性）。外見の非同一的な位置づけこそが、外見に悩む人において主体化を阻んできた第一の特徴であり、従来は外見に関しては主としてこの特徴だけが注目されてきたように思われる。

そしてさらに男性型脱毛症の場合には、外見の「偶有性」という特徴が主体化を禁ずる特徴としてこれに加わる（これは次の章で扱うところの「異形」の外見と違う点である）。この場合、外見は小文字の複数的な他者視線（ x_1 、 x_2 、 $x_3 \cdots$ ）のそれぞれの位置から見られる多元的な自己の姿（ a_1 、 a_2 、 $a_3 \cdots$ ）として現れてくることになる。次の瞬間に見られる他者の視線には、自己の外見は全く違ったように映るかもしれない。つまりどの他者の位置に自らを重ね合わせても、「真なる」自己の外見を同定できない。しかし、それらの視点から現れる複数の自己の姿は「内実と切り離された、それである必然性がない外見」という共通の意味において一般的に捉えられている。同一性を持っていないに意味を持つ、という男性型脱毛症の外見の特徴的な捉え方がそこに現れているのだ。

図 2



第三章 ユニークフェイスの構成員における主体化の機能不全——偶有性の拒否——

このように、男性型脱毛症においては、「健康」であるがゆえに外面を同一性を持つものとして捉えられず、ゆえに被差別者としての主体化が原理的に禁じられる側面があることが明らかになった。しかしもう一方で、こうした外見の問題において被差別者の主体化が可能であるようにみえる事例も存在する。その例としてあげられるのが、ユニークフェイスという団体に所属する人々の体験である。

ユニーク・フェイスとは、1999年3月に、顔面に疾患、外傷のある人たちのセルフヘルプ・グループとして創設された団体である。2002年1月にはNPO法人として認可されている。主に自身の経験してきた体験をおなじ会員の前で語ることによって、姿勢のスティグマを背負った自身の生き方をあらためて再創造していこうとする方向をとる。集まるメンバーは、顔面にさまざまな病変、外傷、先天異常などがある当事者とその家族である。このユニークフェイスのメンバーは、自身の外見を「異形」（いけい）と受け止め、主体化を図っているように見える。それゆえ、この会の分析を通じて、「異形」という言葉によって自身を定置する人々の経験を取り上げてみることにしたい。また今現在、活動や会員の体験談を紹介したりする数冊の関連書籍が出版されているので、それらの書籍と世話人

の一人から伺った話を元に記述をすすめていきたいと思う。なお「異形」という言葉に対する定義の詳細は後述するが⁽²⁰⁾、男性型脱毛症と同じようにこの「異形」も、それを客観的な基準で判定することはできない。それゆえここでは、悩める人が自身の外見を「普通」ではないものとして受け止める時の外見のことを指す、と暫定的に定義しておきたい。

まず、主体化の不可能性を考察するこの論考において興味深いのは、ユニークフェイスにおける入会審査の場面である。元副会長の松本学氏によれば、会の構成員となるためには、当人自身が自分の外見を醜いと思っているだけではなく、会のほかのメンバーにより入会申請時のスクリーニングでその異形の存在が判定されることが必要である。つまり会の入会者にとっては、自身の外見に関する問題は、自分自身の主観的思い込みでなく、他の人々によっても認められる程度の問題であることを自認することになるのである。

ここで、自分が「異形」の姿形を持っているという事実を自認するとはどういうことを意味しているのか。それは、いかなる他者にとっても自身は「普通」とはちがう「異形」の外見をもつものとして見られていると確信することであり、さらに今まで経験してきたつらさや生き難さをその自分の変えがたい「異形」のせいである、と認めることである。松本氏は会員によるスクリーニングがなされる理由を、見た目を神経質に気にする醜形恐怖の患者が入ることで、会の話しやすい雰囲気が悪化してしまうことを避けるためである、と述べている。しかしそれはむしろ、会の雰囲気を守ることに以上、自身の外見を「異形」として当人に確信させる過程であるのではないだろうか。

このようにユニークフェイスの経験においては、生きてきた中で感じた体験やつらさを、自身の特徴的な「異形」を原因として焦点化しなおし、その変わらない異形に対する社会的差別を批判する、という主体化を行っているように見えるのである。

こうしてユニークフェイスの体験を見る限りでは、構成員においては「異形」の外見による被差別者として主体化が成立しているように見える。しかし、ほんとうにそうなのだろうか？ここで一つの疑問を提示しなければならない。それはこの「異形」という言葉であらわされるものは何であるのか、それは自然化されうる本質的属性なのだろうか、ということである。つまり「異形」は、大文字の主体から客観的に同定されたものののだろうか。

さきにも見てきたようにこの「異形」とはやはり人格や主体的能力と対比された「外見」

⁽²⁰⁾ 脚注25参照。

の問題である。なぜならば「異形」というのは人格や内面を包み込む殻のようなものであって、真なる内面や人格を代理＝表象することはあったとしても、その背後のシニフィエ（本質的属性）と切り離されたシニフィアンとしては「ささいなもの」として扱われるべきであることは、ユニークフェイスの構成員においても共有されているように思えるからである。

例えばユニークフェイスの活動主旨においても、「ユニークフェイスは病気やけがなどが原因で、機能的な問題の有無にかかわらず、明らかに「ふつう」と異なる容貌をもつ人たちの集まりです⁽²¹⁾」とかかれており、実際の身体機能と「見た目」の問題を切り離して考えていることが明記されている。つまり、ユニークフェイスの人たちが自身の外見を「異形」として定置するときのその外見の問題は、内面や主体的機能と対置された「形」としての問題なのである。そして、形としての外見自体は内面や人格と比べて重要でないことも同様に表明されている。「考えてみれば、人はみんなそれぞれの「顔」をもっています。私たちの〔顔の〕「違い」も人の〔顔の〕「違い」と一緒のはずで、それぞれが尊重されるべき人格をもった存在です。・・・この顔をもつことに否定的な意味や、哀れみや、特別な意味はないのです⁽²²⁾。」このように活動趣旨においても、自身の外見で判断されるのではなく、むしろひとりの人格をもった存在として扱われるべきことが記されている。つまりこれは、異形という外見は内面の主体的能力や人格と対置された表層の問題であると、悩める人自身も受け入れていることを示しているのである。

このように内面と対置される外見の位置にある以上、異形としての主体化は実際には成立しがたいはずなのだ。内面と切り離されていることを認める限り、異形が本来重要であるべきではない、ということは一般的にも、悩める人においても認められているのだから。そうすると、このユニークフェイスの構成員の例は、被差別者の主体化としては捉えることができないことになる。

しかし、それにもかかわらず異形の人々は、自分のことをはっきりと社会的に「異形」として扱われる者、と名指すことができる。いついかなるときも自分は他の人々から「普通」ではない「異形」の存在としてスティグマを押され続けているということ、この苦しさに対する確信は悩める人の中で強固に成立している。この点は男性型脱毛症と決定的に異なる。それゆえ、外見の「非同一的」な特徴によればこうした名指しはあり得ないはずなのにそれでも「異形」の人々が自分のことを普通ではない「異形」のものと名指せるといふ事態は、男性型脱毛症と同じ主体化の禁止としては異形の問題は捉えられないという

⁽²¹⁾ 石井政之他編，2001，『見つめられる顔——ユニークフェイスの体験』高文研，8。

⁽²²⁾ 松本学他編，2001，『知っていますか？ユニークフェイス、一問一答』解放出版社，8。

ことを示しているのではないだろうか。では、こうした自らの外見を「異形」と名指す行為ははいったいなにを実現する行為なのだろうか。

男性型脱毛症で悩む人に対して異形で悩む人が自身の外見に言及するときには、別の語り方がなされる。それは「病氣・ケガ」という語り方である。

「健康な男の子である兄の次に生まれた女の子は、顔面を含む全身に単純性血管腫といわれる赤いアザを持っていた⁽²³⁾。」

「ある冬の日の早朝、母が目を離したすきに石炭ストーブのそばにゆき、そのセルロイド人形もろとも炎に包まれてしまった。長い入院生活ののち、一命はとりとめたものの、火傷は大きなケロイドを右頬に残した⁽²⁴⁾。」

このような語りは一見省みられるほども無い当たり前の言明にみられるだろうが、先に見た男性型脱毛症における「健康」という言及の仕方と対置させて捉えることが出来る。男性型脱毛症について「健康」であるという言及がなされるときには、そこには非同一性と偶有性という二つの特徴が示唆されていた。そして、それに対して異形の人達が自身の外見を「病氣・ケガ」として言及する場合には、男性型脱毛症と比べて自身の外見が何かを欠いている状態にある、とみているのではないだろうか。そして、前述の通り「非同一性」という特徴を異形の人々が受け入れているのであれば、ここで賭けられているのは「次に会おう人には別様にみられうるかもしれない」という「偶有性」の特徴ではないかと考えられるのである。

実際に「異形」の人々は、男性型脱毛症で悩める人とはちがって、自身の外見を「次の瞬間には変わりうるもの」「別のひとには全く異形とみられない可能性があるもの」とは決して考えていない。ユニークフェイスの入会の場面でも明らかなように、彼らにとっては自身の外見は、だれから見られても「普通」ではない「異形」として見られるものとして受け止められているのである。つまり病氣・ケガという言葉で示されているのは、「次の瞬間には別様に変わりうる」可能性（偶有性）の拒否なのだろう⁽²⁵⁾。そしてその偶有性

⁽²³⁾ 松本学他編，2001，9.

⁽²⁴⁾ 石井他編，2001，96.

⁽²⁵⁾ ここで改めて「異形」という言葉を定義することができる。「異形」とは「容易に変化させることができない外見」のことである。つまり「浮遊できないシニフィアン」のことなのだ。そして第四章で述べるように、浮遊できないシニフィアンは代理＝表象とは異なった形式で再びシニフィエ（内面、人格）に結び付けられる。

の拒否が、自らの外見を「異形」として名指す行為として具体化しているように思われるのである。

なぜこうした「偶有性」の拒絶という位置に「異形」の人々を置かなければならないのか。それはこの外見に関する悩みが、属性差別の被差別者が被る苦しみと全く異質の悩みであることを明確化する必要があるからだ。属性差別の被差別者は自身が大文字の主体からマイノリティの位置に置かれていることを確信し、その立場を引き受けることができる。そして自らをそうした位置に貶める大文字主体に支えられた法や規範（女性差別の場合では女性参政権の剥奪や母性の神話）を敵として設定することができる。しかし、外見が「非同一性」の特徴を持つ限り、こうした大文字主体に支えられた規範を敵として設定することができない。つまり社会一般が自身の外見を「異形／普通」の差異として同定している、と考えることができず、敵がなにであるのかをはっきりと確定できなくなっている。なにが自身の立場を苦しいものに押し込めているのかを確定することができないのである。

それゆえ、男性型脱毛症の場合はそもそも自身の悩みを個人的な思いこみとして処理することを強えられるし、一方異形に悩める人々は自らの悩みが社会的な問題であることを堅く信じていながら、そうした困難な位置に自らを貶める敵を確定することができず、結果として主体化が空回りしている状態にある。自らをどの地点においても人から「異形」として見られる者であると確信しながら、そうした確信を社会的差別の抗議や抵抗につなげることができなくなっているのである。

そのことを示唆するのが、ユニークフェイスの団体としての活動内容である。ユニークフェイスの活動主旨には、普通でない異形の容貌をもつ人たちが受ける様々な問題——いじめ、人付き合いの苦手さ、自信のなさ、就職差別・結婚差別など——からくる生きにくさを共有しあい、社会に訴えていく、と書かれている⁽²⁶⁾。そしてそこには、当事者の自己受容のサポートや見えなくさせられている異形の者たちが感じる苦しさをより世間によく知ってもらおう、とする目的が示されている。だがしかし、そこでは自分たち「異形」の人間に対する社会的差別を告発することが目的とはされていないのである⁽²⁷⁾。

このように、異形の人々においては、一見自身の外見を「異形」として名指すことによって、被差別者としての主体化が成立しているように見えるが、しかしその「異形」から

⁽²⁶⁾ 松本学他編，2001，8。

⁽²⁷⁾ これらのユニークフェイスの提示する問題は、公的領域において属性によって非主体的存在として差別される苦しさというより、私的領域における自由選択の中で起こる選ばれなさという問題である。

くる生き難さや苦しさを社会的問題として訴える敵を想定できないが故に、主体化が空転している状態にあるように思われる。「次の瞬間には異形とみられないかもしれない」という「偶有的」な外見の特徴を拒否し、自身が社会のすべての人々によって紛うことなく「異形」と見られることを確信しながら、しかしそうした人々の視線を大文字の主体からの規範的視線として同定することを「非同一性」という特徴によって妨げられている。こうした異形の人々の困難を、主体化の機能不全と呼んでおきたい。

第四章 外見問題を社会的差別として捉えるために——結びに代えて

男性型脱毛症とユニークフェイスの例を通して見てきたように、外見の問題においては（一見被差別者として主体化できるように見えても実際には）被差別者の主体化が困難になっていることが明らかになった。その理由は以下の通りである。

外見に悩める人は、大文字の主体の位置から時間空間を超えた自らの外見のゆるぎない本質を同定することができない（非同一性）。それは外見が、人格や主体的能力と対比された「非同一的」なものとして位置づけられているからだ。「内実ではないもの」と位置づけられる限り、最初から外見を「真面目」に捉える機会は禁止されている。ゆえに、外見は、「つまらないもの」「ささいなもの」「真面目にこだわるに値しないもの」という言葉で貶められる。そして、それを気にする人間は、小文字の他者の位置からしか自らを見ることができないもの、つまり自立できないものとみなされてしまうのである。こうした「非同一性」の特徴がこれまで外見問題において注目されてきた特徴であり、そして「見かけより中身が重要」というよく知られた建前を構成する。

さらに男性型脱毛症の事例では、頭髪に悩む人は「偶有性」というもう一つの特徴を通して自身の外見を把握していることが明らかになった。「次の瞬間にはハゲにみられないかもしれない」という期待のもとに、自身の外見を大文字主体から「真面目に」同定しようとするのを慎重に避けようとする。そのために、結果として自身の悩みをハゲに対する社会的対応のせいであるとして主体化することが禁止されているのである。

それに対して異形の外見の事例では、悩める人はどんな他人の視線においても自身の外見が普通でない「異形」として見られることを自認している。そしてそのことは、男性型脱毛症の場合とは違い「偶有的」な外見のとらえ方を拒否することになっている。しかし、異形をみずからの人格や主体的能力と切り離して考える点では「非同一的」な外見のとらえ方を踏襲しており、そのせいで、自身の苦しさを生み出す社会的な要因を敵として特定することが困難になっている。（主体化の機能不全）

このように外見に悩める人は、自身の悩みを社会的問題として位置づけ、被差別者として主体化し、社会的な抗議や抵抗を行っていくことが原理的に閉ざされてしまっているのである。

男性型脱毛症——主体化の禁止	異形——主体化の機能不全
・外見の「非同一性」——内面に対置され「真面目にこだわるべきでないもの」としての位置を得る。	
・偶有性という特徴（次の瞬間には変わることが可能——自身の外見を男性型脱毛症として言及できない）	・偶有性をもたない（次の瞬間に変わることができないという確信——自分の外見を「異形」として言及できる）

こうして外見問題が、外見の「非同一性」という位置づけのゆえに、社会的差別として成立しがたい、ということが明らかになった。そして初めに挙げたように、私たちがその上で問わなければならない問題は、次の通りであった。

こうして外見の悩みが社会的差別として成立できない現状をそのまま肯定すべきなのかどうか。むしろ逆に、外見問題を社会的な差別問題として立てることができるためには、現在の差別理論には何が欠けているのか。どのような論理を導入すれば外見問題を社会的な差別問題として成り立たせることができるのか。

外見問題が社会的な差別問題として成立できないのは、大文字の主体から自らの本質的属性を同定し、被差別者として主体化することを困難にさせられているからである。しかし、こうした外見の「非同一的」な位置づけによる主体化の困難に対して、自身の悩みを社会的な問題として扱おうとする態度を示していたのがユニークフェイスに代表される「異形」の人々であった。このみずからを異形と名指す人々の取り組みの中に、外見を社会的差別問題として見いだすための手がかりを得ることができないだろうか。

あるユニークフェイスの会員は、自身の異形の悩みを次のような言葉で表現している。

「私は血管腫を持って生まれ、そのためにある意味、異常な生い立ちを生きてきた。その消しようのない事実が自分に疑問を抱かせるのである。人格形成がなされる時期にいじめの嵐に身をさらしていた人間に正常な人格は根づくのだろうか。常に周囲の視線に神経を尖らせ、攻撃に備えている人間に豊かな心を持つ余裕はあるのか。⁽²⁸⁾」

⁽²⁸⁾ 石井政之他編，2001，20。

このことは外見の悩みに関する重要な指摘であるように思われる。なぜなら、異形の問題を、その異形の人間の人格や心理的側面に結びつけようとする視点が見られるからである。この言葉で示唆されているのは、外見を本質的属性の代理＝表象として扱う仕方とは全く別の仕方、いったん切断された外見の問題を人格や主体的能力といった内面の問題へと結びなおそうとする主張である。

非同一性という特徴から派生する「外見より中身が重要」という建前は、外見の良し悪しをその人間の中身＝内面の問題と切り離す。そして、異形に悩める個人が主体化するときに想定する、外見に対する社会からの規範的視線「異形／普通」を瑣末なものとして無化してしまう。それゆえ、異形の個人が主体化するには、外見と内面の問題をなんらかの形で新たに結び付け、外見のせいで人格や主体的能力が「結果として」損なわれてしまう、という主張を展開せざるをえない。それが、上述の「異形」と「健やかな人格成長の阻害」を結ぶ言葉として表れているのである。

また元副会長の松本氏は、ユニークフェイス構成員の主体化の機能不全に対処するために、外見が異形と見られることでその当人のコミュニケーション能力が損なわれてしまう、という主張を展開する。もし仮に、異形の外見を見る世間一般の人々が、完全に外見自体を内面に対して重要でないもの、判断するに値しないもの、とだけ考えているのであれば、外見を見る大文字主体からの視線を想定できず、結果として異形の人間にとって「普通」の人間と区別されることからくる社会的な苦しみは発生しないはずである。しかし、そうした非同一的な価値が一般に流布しているにもかかわらず、外見に悩める人は強度な生き難さを感じている。そしてそのことは、異形の外見に対する社会的に統合された「別種の」差別的視線が何らかの形で成立して、外見に悩める人を心理的に追い込むような差別的対応が周りからなされていることを推測させるのである。

このように、ユニークフェイスの構成員が主体化するにあたり、外見と人格やコミュニケーション能力の欠損とを結びつける必要があるという主張で明らかになるのは次のことである。異形で悩む個人が主体化するためには、「異形／普通」の規範的な差異が大文字の主体を通して確立している必要があるが、この規範の存在は「外見より内面が重要」という「非同一的」な価値によって無化されてしまう。しかし、それにもかかわらず、自身の外見によってなんらかの統一的な社会的差別対応をされている、と感じ主体化をするのであれば、自身の外見を見る社会的視線を、「大文字の主体からの規範的視線とは別に」想定しなければならないのである。自身の辛さや生きがたさを、社会的な理由で説明するためには、自身が社会的に「何らかの形で」統合された価値によって判定されている、ということを確認しなければならないのである。主体化の機能不全をユニークフェイスの構

成員が乗り越えようとする努力をたどることで見えてくる、外見問題を展開させるための焦点はここにあるのだ。

そしてこの手がかりに対して、私たちが結びつけることができる外見問題の特徴は、男性型脱毛症の分析において外見の「非同一性」と並んで取り上げた「偶有性」という特徴だろう。なぜならこの「偶有性」という特徴で明らかになるのは、外見を大文字の主体から同定することなく見ることができる新しい視線の存在が示唆されているからだ。

先に述べたように、「偶有性」という特徴から外見を見るとき、そこには外見が「内面と切り離された浮遊する表面」という意味で認知対象として成立していると考えられる。それは、客観的対象物である容貌のように、大文字の主体からその本当の属性を同定されているわけではない。「次の瞬間には別様に見られうるかもしれない」というように、多元的な小文字主体の位置からまなざされ自身の「本当の姿形」をいつまでも同定することが出来ない、とされているからだ。しかし、それでも「内実と切断された外見」という意味は確保されている。つまり自分の真なる（本質的な）外見はどのような視線からも同定されることは出来ないけれど、それらの視線が内面を捨象して外見だけを捉える視線、という形式であることだけは悩める人においても確認されている。さらに、その視線から映る外見が「内面と切断された外見」という意味で認知される対象として成立していることも確信されているのである。

この、同一性を保持しないのに意味だけを生み出す視線の存在を、先に述べた新たな形で外見に対する統一的な社会的視線の存在に重ね合わせることができる。大文字の主体から自らを普通とは異なる「異形」として同定することができなくても、全く別の形式で、自身の外見が社会的に「異形」として見られていることを確信できるときにこそ、はじめて外見の悩みを社会的問題として考えるための前提条件が満たされるからだ。この偶有性という特徴に注目することで初めて、「異形」の人々が直面していた外見を眼差す新しい視線の可能性を見いだすことができるのである。

「偶有性」という特徴を分析することで初めて、非同一的な外見が認知対象として成立する可能性に言及することが出来た。残念ながらこの論考では、この外見を認知対象として成立させる新しい視線がいかなる機制によって「異形」という差別項を生み出したり、男性型脱毛症の悩みを生み出したりするのかについて触れることはできない。ただ、今まで非同一性の特徴だけを注視されることで必然的に外見が個人的問題、もしくは考察するに値しない問題として貶められてきた事態を批判的にとらえ、これから差別理論がより展

開されるべき方向を指し示すことはできたと考える。

もちろんこうした議論は、内面や人格といった同一性を脱構築して、被差別者アイデンティティの成立を問題視しているという意味においては、バトラーが苦闘してきた「固定的主体化（アイデンティティ）を超えて生成される創発的連帯」という問題意識等ともその方向性を共有してはいる。しかし本論では、脱構築されたアイデンティティを分析する道筋を、分解された非統合的エージェンシーに求めてはいない。そうではなくて、同一性を分断された「浮遊する表面」としての外見を瞬間的無時間的に接続しながら構成される新たな主体化形式の成立を指摘して、今まで取り逃がされてきた外見問題を社会学的分析の俎上に載せることを目的とした。それによって、アイデンティティと主体化のアポリアを突破して新しい差別現象が展開する可能性をそこに見いだしたのである。

これからの課題は、この「偶有性」の特徴によって示される「内実と切り離された外見」のみをまなざす視線がなんであるかを分析し、そこにどのような力学が潜んでいるのかをより詳細に明らかにすることである。ユニークフェイス現会長である石井政之氏は『肉体不平等』という著書を次のように締めくくっている。「今こそ誰が、あなたの身体を値踏みしているのか、そのまなざしの主を見つめ返すときである。⁽²⁹⁾」

（とかじ たみお・博士後期課程）

⁽²⁹⁾ 石井、2003、192.

Difficulty of Subjectification about an Appearance Problem : A Case Study of Male Pattern Baldness and “Uniqueface” Group

Tamio TOKAJI

This article deal with the problem why the good and wrong of appearance cannot treat as discrimination. The problem of appearance has so far been regarded as a problem which should be solved individually rather than socially, is such a view really right?

What is characteristic of a trouble in appearance is that those who worry about appearance cannot protest to teasing or derision from the surroundings. This shows that those who worry appearance cannot be subjectify as a discriminated person, and obstructs treating a trouble in appearance as social discrimination. Why is it prohibited those who worry from appealing against one's trouble as a social discriminating problem? With this article, it aims at explaining logically the dynamics which does not form a trouble in appearance as a social problem by clarifying such a reason subjectification is forbidden to a discriminating person. Thereby, I want to clarify conversely the limit of the present discriminating theory which cannot deal with the problem of appearance by doing so.

As an example, narration of those who worry about male pattern baldness, and about the appearance as “variant” (the member of Uniqueface) is taken up. And by analyzing those examples, the feature of “Non-identity” and “Contingency” can be taken out as a feature which forbids subjectification of those who worry about appearance. The reason for not complaining of a trouble in own appearance as a social problem is that the principle that adhering to appearance is trifles exists. It shows the feature of the “Non-identity” about appearance. According to the feature of this “Non-identity”, it is difficult for an appearance problem to be materialized as a social discriminating problem.

And those who worry may catch own appearance in a meaning “may completely change to another thing at the next moment”. It expresses the feature of the “contingency” of appearance. According to the feature of this “contingency”, an appearance problem has a possibility that it can think as a discriminating problem newly.

On the appearance problem, only the features of the former “Non-identity” have been emphasized until now. However, by turning one's eyes to the feature of the latter “Contingency”, light will be applied to the possibility of developing a discriminating problem to a new aspect of affairs.